

ICAN Monthly Report 8



「理想の社会」を描く日本の高校生とフィリピンの子どもたち

誰かの問題が「わたし」の問題に変わる日

<国際理解教育事業：担当職員からのレポート>

マニラ事務所で国際理解教育事業を担当している阿部です。アイキャンでは、日本の学生の国際理解研修を、マニラ及び周辺地域で実施しています。今夏は、6月28日～7月12日の15日間、名古屋の高校2年生8名が参加しました。

この研修は、高校生が世界の問題を「わたし」の課題として捉え、よりよい社会を作る一人となっていくことを目指しています。15日間の中で、現地の高校やアイキャン事業地、社会起業家等を訪問しますが、研修の山場となるのが、路上やごみ処分場周辺地域の子どもたちと過ごす2泊3日の合宿です。

合宿ではまず、ゲームなどを通して子どもたちの緊張をほぐしてから、自分の地域や家族など、それぞれが置かれた境遇を話すことで、相互理解を深めます。ある路上の子どもは、「僕の親はご飯をくれない。だから小さい頃から果物を切る仕事をして、自分で稼いでご飯を食べているんだ。」と話しました。自分とは違いすぎる環境に言葉を無くす高校生もいます。

しかし、ただ話を聞くだけでは、フィリピンの子どもが抱える問題は、自分とは別の問題という認識で終わってしまいます。この合宿では、これまでは遠い外国の知らない子の問題であったことが、今、目の前にいる友達の問題になった時、その子や同じ境遇にある子が幸せであるように、どうい社会であるべきかを皆で考え、各自が「わたし」の問題として意識できるよう、促していきます。

そうしたプログラムを経て、合宿2日目の夜、グループに分かれて「理想の社会」の絵を描きました。「誰もが安心して暮らせる家がある」、「お金がなくてもみんなが学べる学校がある」など、文化や境遇が違って、目指す理想の社会は同じであることを皆で認識しました。そして最後に、その理想の社会に向けて自分が実践することを、一人ひとりが誓いました。

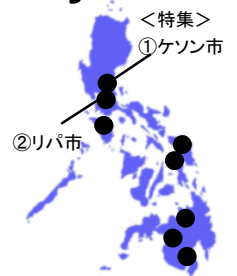
帰国前夜、8名の高校生は、「自分や自分の国のことばかり考えず、もっと世界が注目すべき。僕はこの問題に対して将来何かしたいと思う。」など、研修初日とは明らかに違う表情で話していました。

彼らの先輩にあたる元参加者たちは、帰国後、フェアトレード製品の販売や街頭募金活動等に取り組むとともに、研修での学びを進路選択にも活かしています。世界の問題を自分事として捉え、理想の社会に向けて行動する人が増えるよう、私たちはこれからも、国際理解教育に力を入れていきます。



ICAN マニラ事務所
阿部真奈 (あべまな)
～プロフィール～
亜細亜大学国際関係学部卒業。日系 NGO のフィリピン駐在員を経て、2009年よりアイキャンのボランティアへ。外務省インターンプログラムを経て2012年4月より現職。

Project Site



※●はアイキャン活動地
※番号は裏面に対応

認定 NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

①路上の子どもたち(ケソン)

初めてのコーヒー作り



協同組合カリエが運営するカフェの内装工事が完了し、13名が店内でコーヒー作りの練習をしました。焙煎方法を変えた作り方や、ミルクを加えたカフェラテ、カプチーノ、マキアートの作り方を学びました。ジェyson君(19歳)は、「コーヒーメーカーはボタンがたくさんあって、最初は自分にはできないと思ったけど、練習して作れるようになって嬉しい」と語りました。(7月25日)

②障がいをもった子どもたち(リバ)

職業訓練所の成果と課題



障がい者団体の活動内容や課題を調査するため、NVRC(国立職業訓練所)を訪問しました。「マッサージの技術を習得し、自信が持てた」と訓練生が語る一方で、講師は、「訓練生の子どもも障がい者であることが多いが、NVRCは18歳以上を対象としており、子どもにまで対象を広げる余裕がない」と話しました。引き続き調査を実施し、アイキャンでできることを考えていきます。(7月22日・30日)

今月のICANを増やす活動

MYアイキャン事業

7月10日/名古屋

ボランティア発案のイベント

マンスリーパートナーの大学生Kさんが「NGO職員に聞いてみよう!」をテーマに自主イベントを開催しました。集まった10名の参加者からは、「NGOのやりがい」「NGO職員に求められる能力」「社会を変えるために今必要なこと」など、様々な質問が出ました。終了後、「貧困の現状をもっと学びたい」「NGOでインターンをしたい」等の声があり、各自のできること(ICAN)を見つけたようでした。



国際理解教育事業

7月30日/瀬戸

平和について考える

聖霊中学高等学校の定例行事「平和のつどい」において、中学1年生159名に対し、講演を行いました。ミンダナオの紛争地から平和について考える内容で話した後、今年は「平和」がテーマとなる絵手紙大会「トゥライプロジェクト」を紹介しました。講演後、担当の先生から「生徒たちも現地をイメージできたと思う。絵手紙以外にも、募金など、できることに取り組みたい」との言葉を頂きました。



今月のTopics



高校生が広げる、フェアトレードの輪

今月、愛知県内の3つの高校の生徒が事務所を訪れました。内、2つの高校の生徒は、学校の文化祭でフェアトレード商品を販売するための商品選びを行い、またもう1つの高校の生徒は、事務所でフェアトレードの勉強会を行いました。活発な高校生たちの力で、パヤタスの生産者団体SPNPの製品が、日本に広まっています。

今月のMedia

新聞に1件掲載されました!

7月26日 岐阜新聞 「路上の子の貧困解決探る」 海外事業部吉田のインタビュー

今月のICANな人

◎村上さん、長年にわたって応援してくださり、ありがとうございます!

マンスリーパートナー 村上国広さん

「現地を知った衝動が原動力に」

インタビュー:8月5日

私は、アジア各国を旅行した時に、路上で花を売る人や物乞いをする人などを見て、貧困問題に関心を持つようになりました。自分は旅行するお金もあり、何かできる環境にいる、何ができるだろうかと思い、インターネットでアイキャンを見つけました。

ボランティアで活動に2~3回参加した頃、当時のインターンスタッフに、ボランティアの横のつながりを作り、ボランティア中心の活動をしたいと提案しました。その後、月1回の勉強会を開くようになり、皆で何がしたいかテーマを決めて毎月集まるということをし、5年くらい続けました。現在も行われている、月1回の街頭募金も、そんな中で始まった活動です。

活動のモチベーションは、やはり、現地を見たことです。子どもたちは笑顔で、貧しくてもキラキラしていて幸せそうだったけど、実は不衛生な環境や水で病気になったり亡くなったりすることが分かり、衝動的でした。自分はそこからすぐ行動を起こしたから、その時の想いを持続できたのだと思います。また、活動する中で現地の写真を見たり、人に説明するために調べたりして、自分自身も成長できました。同じ意識を持つ人が集まり、想いを共有できるというのも、自分にとっては大きかったです。

今後も、マンスリーパートナーとして、持続的に協力していきたいです。活動は、長く続けることで価値が出てくると思うので、無理をしない程度に続け、アイキャンにも現地の子どもにも、貢献できればと思います。

